

Title	憶良所引「魏文惜時賢詩」
Author(s)	井村, 哲夫
Citation	大阪大学古代・中世文学研究会会報. 2 p.1-p.2
Issue Date	1985-10
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67229
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

懷良所引「魏文惜時賢詩」

井村 哲夫

一 魏文惜時詩

万葉集卷五、山上憶良作「沈痾自哀文」の中に、魏文帝（曹丕）の五言詩の逸句が引用されている。

一代權樂、未盡席前へ魏文惜時賢詩曰、未盡西苑夜、劇作北邙塵也、千年愁苦、更繼坐後へ古詩云、人生不滿百、何懷千年憂矣。

一代の權樂、未だ席前に尽きずしてへ魏文の時賢を惜しむ詩に曰く、「未だ西苑の夜を尽くさず、劇（たちまち）に北邙の塵となる」と、千年の愁苦、更に座後に繼へ古詩に云はく「人生百に満たず、何（いか）にぞ千年の憂へを懷かむ」と。

「惜時賢詩」は、今日不明の作品であり、小島憲之氏（「山上憶良の述作」『上代日本文学と中国文学』中）も言われる通り、「何かの孫引」を懷良がなしたもののかもしれないが、曹丕の五言詩は現存二十数首にすぎないとすれば、これは貴重な逸句と言える。「西苑」は、小島憲之氏が指摘されたように、ここは当然曹操が鄴都（河南省臨漳県）に作った西園であろう。通常は「西園」と書かれるが苑は苑に同じであり、「西苑」と書いた例は、これも小島氏前掲書に指摘がある通り、劉楨「贈徐幹」（文選卷二三）に、「歩出北寺門、遙望西苑園」と見える。「北邙」は、河南省

洛陽県の東北にある芒山で、漢以来の葬処。以上で、此の逸詩の内容もほぼ推量せられてくる。すなわち、西園の夜の飲樂（）も尽くし果てぬうち、たちまちに北邙の塵となった、某（題に言う「時賢」）を痛み惜（あわれ）む詩であるらしい。

さて、ここに痛惜せられている「時賢」とは、建安十七年から二十三年にかけて相繼いで死んだ、いわゆる建安七子の中の六人へ阮瑀（げんう）・陳琳（ちんりん）・応瑒（おうとう）・劉楨（りゅうてい）・徐幹（じょかん）・王粲（おうさん）を指して言うと推測される事情がある。「与呉質書一首」（文選卷四二）による推測である。

同書状は頭書のあと、昔年疾疫あり。親故（しんこ）多く其の災ひに離（あ）ひ、徐・陳・応・劉、一時に逝く。痛み言ふ可けむや。と嘆き、

昔日遊びし処、行けば則ち輿を連れ、止れば則ち席を接（まじ）ふ。何ぞ曾て須臾（しばらく）も相失（か）けむ。觸酌（しやうしやく）流れ行き、糸竹（しちく）並び奏（かな）づるに至る毎に、酒は酣（たけなわ）に耳は熱く、仰ぎて詩を賦す。此の時に当り、忽然（ゆるがせ）にして自ら樂しむことを知らざりき。

と昔日の交友の思い出を述べ、謂（おも）へらく、百年は己の分にして、長く共に相保つべしと。何ぞ図らむ、数年の間に零落して略（ほぼ）尽きむとは。之を言へば心を傷ましむ。頃（このころ）其の遺文を撰びて都（すべ）て一集を為（つく）る。其の姓名を観れば己に鬼録と為る。昔遊を追ひ思へば、猶心目に在り。而るに此の諸子、化して糞壤と為る。復（また）道（い）ふ可けむや。

と悲しむ。以上の文脈の上に、先の逸句「未だ西苑の

夜を尽くさず、劇に北邙の塵と作る」は、そのまま重なるであろう。

書状は、続けて徐幹・応瑒・陳琳・劉楨・阮瑀・王粲の順に、六名の文才と個性を説き、

諸子は但末だ古人に及ばずと為すとも、自ら一時の雋（しゅん）なり。今の存する者已に逮（およ）ばず。

と惜しむのである。「一時の雋」、則ち逸詩の題「時賢」に当るはずである。

書状は最後に、年齢三十余歳にして太子の高位にあり、もはや昔日の遊はふたたび為し得ぬところかと恐れ、

少壮真に当に努力すべし。年一たび過ぎ往けば、何（いか）にしてか攀援（はんえん）（はんえん）すべし。古人の燭（しよく）を炳（と）りて夜遊はむことを思ひしは、良（まこと）に以（ゆ）有り。頃（このころ）何を以てか自ら娛（たの）しむ。頗復（ややまた）述造するところありや不（いな）や（三）。云々

と結んでいる。

以上、「与呉質書」を以て、先の逸詩「惜時賢詩」

の作意と内容はほぼ付度できるであろう。それは、曹丕が昔日の遊（南皮の遊、また西園の夜）を共にした文学仲間、いわゆる建安七子たちが、すぐれた才学を抱きながらその美志を遂げぬまま相繼いで逝ったことを痛惜する詩であり、おそらく更に加えて、曹丕自らは努力して百年を保ち、燭を炳（と）って夜遊ぶ樂しを尽くそうということ、あるいは述作に励みたいという志を述べた詩であるらしいと考えられる。

ちなみに、その述作の時期もまた「与呉質書」と同時期と思われる、同書状は曹丕三十余歳で太子の位にあることを述べるから、徐幹の死んだ建安二十三年（時に曹丕三十二歳）から延康元年（曹操死。曹丕三十四歳）ごろへかけての述作と考えられる。

注1

曹丕「芙蓉池作」（文選卷二二）、

輦（くるま）に乗りて遊び、逍遙して西園に歩む。：（中略）：丹雘（たんか）は名月を夾（はさ）み華星（くわせい）は雲間に出づ。上天光采を垂れ、五色一（もはら）に何ぞ鮮（うるは）しき。寿命は松喬（しょうきょう）（しょうきょう）に非ず、誰か能く神仙を得む。遨遊（がういう）して心意を快（よろこ）ばしめ、己を保ちて百年を終へむ。

右のごときが「西苑夜」の飲樂のさまである。

2

建安七子の一人孔融（こうゆう）は、曹操に忌まれて、早く建安十三年に誅せられている。

阮瑀は建安十七年に没し、王粲は建安二十二年呉遠征の陣中で死んだ。陳琳・応瑒・劉楨は疫疾により建安二十二年没し、徐幹も同じく二十三年に死んだ。

3

曹丕は同じ思想を、注1に引いた「芙蓉池作」や「善哉行」（文選卷二七）にも述べている。

た無常の人生にあつて著述を不朽のものとして尚ぶ思想は、「与王朗書」（明・張溥編・漢魏六朝百三名家集「魏文帝集」ほか）に、

人生七尺の形有り、死にて一槍の土となる。惟（ただ）徳を立て名を揚ぐるは、以て不朽なるべし。其次は篇籍を著すに如（し）くは莫し。疫癘（えきれい）（しばしば）起り、士人雕落（てうらく）す。余独り何人なればか能くその寿を全くせむ。

（京都府立大学）